

マドレデウスのコンサート②

闇の中、歌姫が語る

コンサートの会場は、小高い丘の頂上にある朽ち果てた石壁に囲まれた城跡だった。チケットも村役場で手に入れ、コンサートまでの3日間を過疎の小さな村で過ごした。

見るものが何も無く、一つしかない雑貨屋で小さなカップに入った濃厚なカフェを買い、道端で老人たちの話に耳を傾けた。丘の上ではのんびりと準備が進んでいた。

コンサートの当日、驚くほど多くの車がやって来た。正装のカップルが目につく。私はタキシードなど持っていない。村人たちもそれなりに着飾っている。最前列はマスコミ関係者、次が招待された正装の人たち、その後方が一般席である。私は、日本からきたマス

コミ関係者だと主張して最前列に座った。

仮設の舞台でコンサートが始まった時、ホテルのバーで飲んだ極上のポルトワインの酔いが急にまわってきた。歌姫の清らかな澄んだ声、瞑想へと誘うギターの旋律、私は音の海に泳ぐ魚だった。突然、音が消え、光が消えた。仮設の発電機がオーバーヒートしてしまったのである。

すべてが停止してしまった闇の中で、歌姫が静かに語りだした。静まり返った城跡で月明かりに浮かぶ歌姫の白い衣装。その瞬間、観客は私一人だと感じていた。身を削り、足を運ばなければ出会えないものがある。私の生涯を、その一瞬の積み重ねで満たしたいと願った。



橋本白道

佐賀県生まれ。京都で陶芸と出会い、備

前で修業後、故郷に窯を開いた。スウェーデンやリトアニア、ドミニカ共和国に滞在し、ドキュメンタリー映画や陶芸学校づくり挑戦した。2007年、美郷町上野の空き家に、リトアニア出身の陶芸家ベアトリチエさんと夫婦で移住し陶芸工房を開いた。